

婦人宣教師、ミセス・プラインの
「おばあちゃんの手紙」 (10)

～アメリカン・ミッション・ホームの
創立者の一人～

小林 恵子

二一

横浜、一八七四年三月十八日

アルバニーの職業学校の先生と生徒たちへ

皆さんたちからの小さな献金をとても嬉しく頂きました。いつも、皆さんたちが私のこと、その仕事の事を心におぼえて下さっていることは判っていますが、この献金を頂いて一層そのことを心を感じ感謝の気持ちで一杯です。それで、遠く離れた島国の日本で主イエスが私たちを祝福して下さいている仕事の幾つかをお話ししたいと思います。

主の恵みは数えきれないほど多く私たちに与えられているので、そのすべてをここでお話することはできません。もう、すでに皆さんたちは私たちのホームや学校のことについてかなり聞いておられると思いますので今回は日本の国で私たちが日曜学校を実際に開いたことをお知らせして喜んで頂きたいと思います。……略……

あなたたちがご存じのように、このホームは特別

に子どもたちために開かれたのですから私たちはできる限りの事をして子どもたちのために役に立ちたいと思っています。

そこで私たちは子どものために日曜学校を開くことに決めたのです。日本での最初の日曜学校です。

今や多くの人たちが各地でいろいろな方法で教えていますが日曜日に聖書を学ぶことができるのは青年たちのための幾つかのクラスがあるだけなのです。しかも、私たちの日曜学校はアメリカのものと同じようにとても楽しく役に立つことを指導している日曜学校です。

もし皆さんが私たちを訪問して下さいればお判りになるのですが、日曜学校の始まる様子を見なければ午後三時半きっかりにここに来て頂かなければなりません。日本人は時間の価値についての考えがなくて、時間厳守という事を学ぶのは最も難しいことの一つです。ですから私たちは日本人に接する時には時間を大切にすることを特に心がけているのです。

日曜学校の教室は大きくて明るく楽しい雰囲気の中で、小さな椅子と背もたれのない腰掛けを沢山用意しています。子どもたちは自分の家やお寺では畳に座っていますが、ここでは床に座らせたくないのです。平日にいつも使っている机をみんな壁ぎわの片隅に片づけ部屋の真中に椅子だけを置いてあります。

部屋の一方に教壇があつて、その上に聖書と讚美歌とベルが置かれ二つの大きな籐椅子が並んでいて、教壇の側には小さなオルガンがあります。アルパニーの教会のものとは比べたらとてもお粗末なものと思いますが私たちがもっと立派なものを買えるようになるまではこのオルガンがとても役立っているのです。

今は全部で四十名の子どもたちが来ていますが、その数はどんどん増えていきますので皆さんがこの手紙を読まれる頃にはもっと増えていると思います。何人かはとても幼い子どもで、何人かはかなり大き

子どもたちです。最初の礼拝は全員が一緒に座って行いますが、これはアメリカの日曜学校と殆ど同じです。それからクラスに分かれます。一番幼い子どもたちは先生に連れられ他の部屋に行きます。このクラスは私たちの幼児学級です。とてもお行儀がよく他ではちょっと見られないお利口さんの小さい子どもたちです。

大きな部屋では三つのクラスに分かれ、それぞれに先生を囲み輪になって座ります。先生の方を向いて熱心に聞き取ろうとする子どもたちの輝いた顔や賢い質問や応答のやりとりを皆さんたちが見ることができたら、ここで過ごす時間が教師と生徒にとってどんなに喜ばしいひとときだという事がお判りになるでしょう。

日曜学校が終わっても誰も疲れた様子はなく帰りを急ぐこともないのですが時間厳守は私たちの規則なのです。それに、もう少し聖書を勉強したいと思うところで止めておくほうが次の日曜日にもまた行

こうという意欲をもたせることにもなるのです。

終わりの礼拝はいつもとても楽しいものです。

時々参観に来る人たちは大変満足し興味を示してくれます。子どもたちは先週の日曜に配られていた聖句をクラスごとに暗唱します。そして讚美歌を歌い、立ったまま使徒信条を唱え、ひざまずいて主の祈りを唱えます。この礼拝が始まる前には別の部屋にいていた幼児学級の子どもたちも再び大きな部屋にもどってきて一緒に礼拝を守ります。

こうして、私たちの日曜学校は五時に終わります。先生も生徒もみんな日曜学校に出席するのを特別な恵みと感じ楽しみにしているのだと私は思っています。

さて、皆さん、あなたたちが貯金して送って下さったお金のことを心から感謝しています。皆さんたちがわずかしかお小遣いを持ってない事は私もよく知っています。でも神様はきつと、お金持ちで何でも沢山持っている家の子どもたちよりもあなたた

ちの小さな献金をより良いものとして下さるでしょう。
……略……

いつも皆さんたちを愛しているお友だち

メアリー・ブライン

*

二三

横浜 一八七五年一月十八日

アメリカの日曜学校の子どもたちへ

親愛なる皆さん、お目にかかったことはありませ
んが私たちはもう既にお友だちになった気がしま
す。そこで私は皆さんたちにこの遠い国、日本での
私たちのホームとそこでの仕事について長い手紙を
書こうと思います。

アメリカの日曜学校の子どもたちと文通できるな
んで、これ以上に嬉しいことはありません。皆さん
たちにも是非この仕事を一緒に手伝って頂きたいの

です。この手紙を書くにあたって、ただ一つ残念な
のはこの仕事がどんなに興味ぶかく勇気づけられる
ものか、この仕事に携わることの幸せを私が思うよ
うにありありと言葉で書きあらわせないことです。

このミッション・ホームで神さまは私たちに大変良
いものを与えて下さいました。この仕事を始めて間
もなく大勢の可愛い子どもたちがイエス様を愛し祈
ることを教えられ、また少女たちや小さな子どもた
ちがこのホームに来て日に日に元気になり、快適で
幸せに生活している姿を見る事はこのホームで生活
を共にしている私たち婦人宣教師にとって本当に嬉
しいことです。実際にここに来て皆さんたちの目で
見て頂ければどんなによく判って貰えるでしょう
に。……略……

この手紙に写真を一枚同封しておきます。(写真
参照)どうぞ、じっくりご覧になって私たちの学校の
外観がどのようなものか見て頂きたいのです。そ
して、この建物にいつも明るく幸福な子どもたちの



SCHOOL HOUSE OF THE AMERICAN MISSION HOME, YOKOHAMA. Page 172.
(From a Photograph.)

顔が満ち溢れている様子を想像して頂けたら幸いです。この写真にはホームの子どもたち全員が集まって貰うことが出来ませんでしたのでほんの数人しか写っていませんが、子どもたちや少女たちの様子が判ると思います。そして神さまがこのような立派な学校と快適なホームを私たちに与えて下さったことが写真から判って下さるでしょう。

この学校は日本の女の子の教育のために設立された最初の無料の学校です。今は他にもう一つ学校があります。私たちがこの学校を立派に継続させ、この土地で神の栄光をほめたたえる事をどんなに熱望しているか、またアメリカのクリスチャンの人々の力によって設立されたこの学校の光栄と名誉のためにも立派に存続させたい事が皆さんにも判って戴けると思います。

この写真で横に見える大きな部屋が本館の教室です。そこでは私たちの学校の授業がなされるだけでなく、日曜日の朝の一つの礼拝を除いて日本人のた

めの教会の礼拝も行われています。また、ここではクリスチャンの少女たちの祈禱会も開いています。日曜日の朝には私たちのホームの礼拝もあります。全員が揃うと六十人以上にもなる礼拝がここで行われています。この建物の裏がわの部屋は縫物や書きものをする部屋になっています。

時間があれば私はホームの住まいの内部について、特に少女たちの勉強部屋についてお知らせしたいのです。少女たちは夕方になると自分たちの本を持って二つの大きなテーブルの周りに座って勉強します。彼女たちは本当によく勉強しますのでこちらから勉強しなさいと注意するよりむしろ適度の運動や遊びも忘れないよう見守ってやらなければならぬいほどです。次に私たちの素敵で新しい食堂を紹介しましょう。三十六人の少女と小さい子どもたちはついこの間までは床の上へべたりと座ってお腹が空けば何時でもかまわず箸や手で物を食べ、規則や礼儀など考えていなかったのですが、今ではテーブル

の周りに静かに行儀よく座ってテーブルクロス、ナフキン、ナイフ、フォークなどを使って礼儀のよい立派な態度で食事をしています。食堂でこうした子どもたちを見るのは大変楽しいものです。次は小さな子どもたちの遊戯室を紹介しましょう。そこではどこにでも見られるような陽気で明るい子どもたちの仲間を見ることができません。数週間まえアメリカの親切な友だちが送ってくれたクリスマスの贈物を子どもたちにわけ与えたもので遊んでいる姿も見られます。次は寝室に皆さんを案内しましょう。特別にお見せしたい一つの部屋には小さなベッドがずらりと並んでいて、小さい頭が枕の上にとても可愛らしくのっかっているのです。そこを通る時には「イエス様、この小さな者たちを祝福して下さい」と祈って子どもたちにキスをするため立ち止まらずにはいられません。

さて皆さん、これらのものすべてをどうか想像し

てみて下さい。そして日本の若い人たちをイエスの愛に導くために私たちを援助することをもう一度考えてみて頂きたいのです。……略……

さて、ここでアメリカの親切な一人の婦人によって経済的援助を受けている一人の女の子のお話をしましょう。皆さんもきつと喜んで下さると思います。それは「おその」という名前の女の子ですが頭がよく、とても良い子です。私たちはこの子の勉強がぐんぐん進歩し明るくて行儀のよいのを見てとても喜んでいきます。

二週間ばかり前、彼女は母親に会いに行きました。彼女の父親は金持ちの貴族でしたが、その家庭は今では貧しいのです。でも、彼女の父親に対する世間の評判は以前と同じように今も尊敬されています。台湾で戦争が始まったとき彼は高い地位に任命され、軍隊と一緒に台湾に行きました。でも数週間の中にそこで熱病にかかり死んだのです。このため、この子の母親は気の毒にも一人残され今は家族

の生計を支えるのに援助もなく苦境に陥ったのです。おそのが家に帰っていた時、台湾攻略の最高指揮官で彼女の父親の畏友であった西郷はおそのに母親と一緒に彼の家を訪ねるようと言ってきたのです。二人が西郷の家を訪ねると彼はおそのに勉強していることをいろいろ質問した後には彼女が読んだり歌ったりするのを聞いて日本人で彼女のように英語を上手に発音するのを聞いたことはないと言ひ感心したのです。そして、かれはおそのが先生になる準備ができたらずぐに薩摩で一番立派で大きい女学校の先生にすると約束してくれたのです。薩摩というのは西郷の生まれたところで、彼はこの地方で強い影響力と権力をもっていたのです。これを聞いて彼女の母親がどんなに安心し、おそのを勇気づけたか、また先生になろうと勉強している他の少女たちにも励ましとなったか皆さんたちにもよく判って頂けると思います。これは、神の助けによって福音の流れがこのホームから美しい日本の国の隅々ま

で流れていくことを願っている私たちにとって大きな喜びでした。

おそのは二年半前、このホームに来たのですがその時には英語はなに一つ知りませんでしたし、日本語もほんの子どもの話す言葉しか話せなかったのです。彼女は今、十一歳すこしになりますが勉強についてはアメリカン・スクールの同年代の少女たちの大半よりずっと進んでおり、この教室の誰よりも流暢に正確に朝の祈りの言葉を読むことができます。

親愛な友たちである皆さん、私たちの事業はこうした子どもたちによって実際に成果をあげている事が判って頂けると思います。あなたたちが愛し仕える主に日本の子どもたちを導くため皆さんたちができることを何でもしようとするあなたがあなたの心に働きかけて下さる事を信じています。

主イエスによる真実のお友たち

メアリー・ブライン

最初の手紙はブラインが日本に来るまえに勤務していた故郷、アルバニーの職業学校の生徒にあてて書いたものである。僅かなお金ではあっても皆が貯金して送金してくれた事を心から感謝し、ホームで始めた最初の日曜学校の様子や礼拝の守り方を詳しく書いている。小さい子どもを対象として聖書や讃美歌を教える日曜学校は新教ではおそらくここが最初のもと考えられる。幼児にとっては午後三時半から五時までは多少無理があると思われるがおそらく兄や姉と一緒に来たもので聖句の暗唱などは大きい子どもの唱えるのを聞いていたのであろう。珍しいこともあって大勢の子どもが集まってきた当時の日曜学校の様子が想像できる。

次の手紙はアメリカの日曜学校の子どもたちにあてたもので、この手紙には写真がついており、「おばあちゃんの手紙」の本の最初に掲載されている。この写真は『横浜共立学園の二二〇年』写真集に「二一二番に最初に建てられた校舎」として向かって右端のベンチに腰かけているのがブライン、中央の椅子に座っているのがピ

アソン、左方に立っているがクロスビーと説明されている。

この学校は日本の女の子の教育のために設立された最初の無料の学校と記されているが、当時のアメリカは南北戦争を機として人道主義にもとづく運動が盛んで特に宗教団体によっていろいろな社会改良事業がすすめられた。混血児の教育と女子教育のために設立されたこのホームは米国婦人一致外国伝道協会によって設立されたものでアメリカの多くの教会の婦人会の人々の献身的な経済の支えを受けていた。また、教え子や日曜学校の子どもたちなどの小さな献金もミセス・プラインたち婦人宣教師にとっては心の支えとして嬉しい贈物であった。食堂で西洋式のテーブルマナーを教え、これをよいものとするやりかたには今の私たち日本人として反発もしたいところであるが、当時の婦人宣教師たちから学んだ規則や時間厳守などは恐らく日本人の最も苦手なことだったと言えよう。

「おその」は「木脇（きのわき）その」が彼女の名前

で明治五年、八歳でこのホームに入寮した。亡き父の友人、西郷従道（西郷隆盛の弟、海軍大臣、陸軍大臣の経歴）の邸に呼ばれ従道の前で流暢な英語を話し、感心され後に鹿児島で立派な女学校を建ててから先生になってほしい言われたという。彼女は実際には明治十五年卒業後、この共立女学校で長く英語と音楽を教えた。（註1）

（国立音楽大学）

〈註1〉『横浜共立学園一二〇年の歩み』横浜共立学園
一九九一年 一三三頁